

海外

# 花人探訪

取材・写真/朝山和代



キューケンホフ公園（オランダ）。アーチやコーン型、ヘッジなどが整然と並ぶ。オレンジ・ナッソー・パビリオンがよく見え、絶妙な高さのバランスが保たれる。

## 木靴が歴史の始まり

ファンデンベルク社

「オランダのシンボル」といえば風車と木靴。海拔0mを下回る土地が多いオランダは、洪水との戦いの歴史の上に成り立っていると一言でも過言ではない。木製の風車は低地から水を汲み出し、その羽根の回転力で粉を引くというすばらしいエコ・マシーンだ。風車には家としての役割もあり、かなり効率よく暮らせる仕組みになっているのもおもしろい。風車のある土地は柔らかいところもあり、埋まりにくい木靴は誰もが使う日常の履物だ。みやげもの屋で多く見かけるので、現在は使われていないのでは、と思う人も多いのだが、今も少なくなくなったとはいえ使われている。

約100年ほど昔、オランダ南部で生活するファンデンベルク一家は食肉にする家畜を育てていた。当時の農民はポプラを植え、木靴を作っていた。近代化が進むと人々は木靴を履かなくなり、ポプラの需要も減ってしまった。ファンデンベルク家の息子ヤンは12歳の時から樹木栽培を始め、彼はポプラに限らず、いろいろな品種を植えていった。ついに彼はそれを生涯の仕事とし、1941年にファンデンベルク社を設立したのである。現在ヤンは引退し、彼の弟であるポウルスが社長を務めている。そしてヤンの息子のヨハンがスタッフとして働いている。



上/ルーブル美術館のガーデン。低くたくさんのボール型がグリーンを広く見せている。見た目には、より多くのグリーンを感じるようになる。  
下/振り上げて根巻きを施した木。高さ17mの出荷場に運ぶ。